

被災体験 世界に発信

高校生らダボス会議へ



教育支援グローバル基金の坪内南事務局長
(右)と話す菅原さん(仙台育英高で)

震災で家族を失うなどした岩手、宮城、福島3県の高校生、大学生の計7人が、14、16日に中国・大連で開

かれる「夏季ダボス会議」に出席する。世界各国の政財界のリーダーが一堂に会する場で、7人は被災地の代表として被災体験を語り、支援を訴える。

7人は、ダボス会議にた

びたび参加している国内の若手経営者らが設立した財団法人「教育支援グローバル基金」が招いた。

出席者の一人で、宮城県仙台育英高1年、菅原彩加さん(15)は、石巻市の自宅が津波に流され、母と祖母を亡くした。菅原さんが卒業した同市立大川小学校では、児童74人が死亡・行方不明になった。

菅原さんによると、助かった児童もいまだにショックから抜け出せず、不安定な精神状態が続いているという。「津波やがれきの山などの映像は世界に伝わったが、子どもたちの心の傷など、目に見えないことは、よく知られていない」。会議では被災地の子どもへの心のケアについて、重要性を訴えたいという。会議には、2008年の四川大地震で被災した学生も参加を予定しており、被災者同士の意見交換も行われる予定だ。